41. キノメの栽培

一津屋や戦前からウド・鳥飼ナス・マクワウリなど換金作物を手掛けてきたところで昭和 30 年代にはキノメが盛んに作られた。その様子を S 氏から聞いた。

◆一津屋のキノメ（木の芽）

一津屋では戦前からキノメを栽培している人がいたが、昭和 30 年頃からは促成組合も作られ 17〜8 軒の農家が出荷していた。多くは元のウド農家で昭和 45 年頃まで続いた。

◆温床で育てる

〈A〉はキノメのカマ。一津屋は区画整理が進んで 10 間×30 間で 1 反。その短辺方向いっぱいに 3 尺×9 間、つまり 90cm×16m の範囲を 45cm ばかり掘り下げ、10cm の切り藁とワタミカス（綿実かす）を交互に入れて水を掛けて踏み込む。底から 30cm 程になるまで踏み込んだら、上に土を入れ、キノメの苗を〈D〉のように横たえる。

藁と綿実かすの発酵熱で苗の成長を促進する温床栽培である。

◆障子をかける

〈B〉はカマの上にかける保温の障子。障子は長さ 1 間（1.8cm）×幅マナカ（半間＝90cm）で、カマボコ形の竹の骨のアーチの上に障子紙をはって、エー（荏ごま）の油をハケで塗った。荏油は種屋に置いていた。10 カマ程栽培していたので障子も 80〜100 枚程持っていた。この障子はよそではサツマイモなどにも使われていた。

◆片屋根で覆う

〈C〉は片屋根の小屋。障子で覆ったカマの上には、足場丸太で片屋根の覆いを付けた。カマ 3 列をカバー出来る大きさで、かつてのウド小屋の資財を転用したのである。

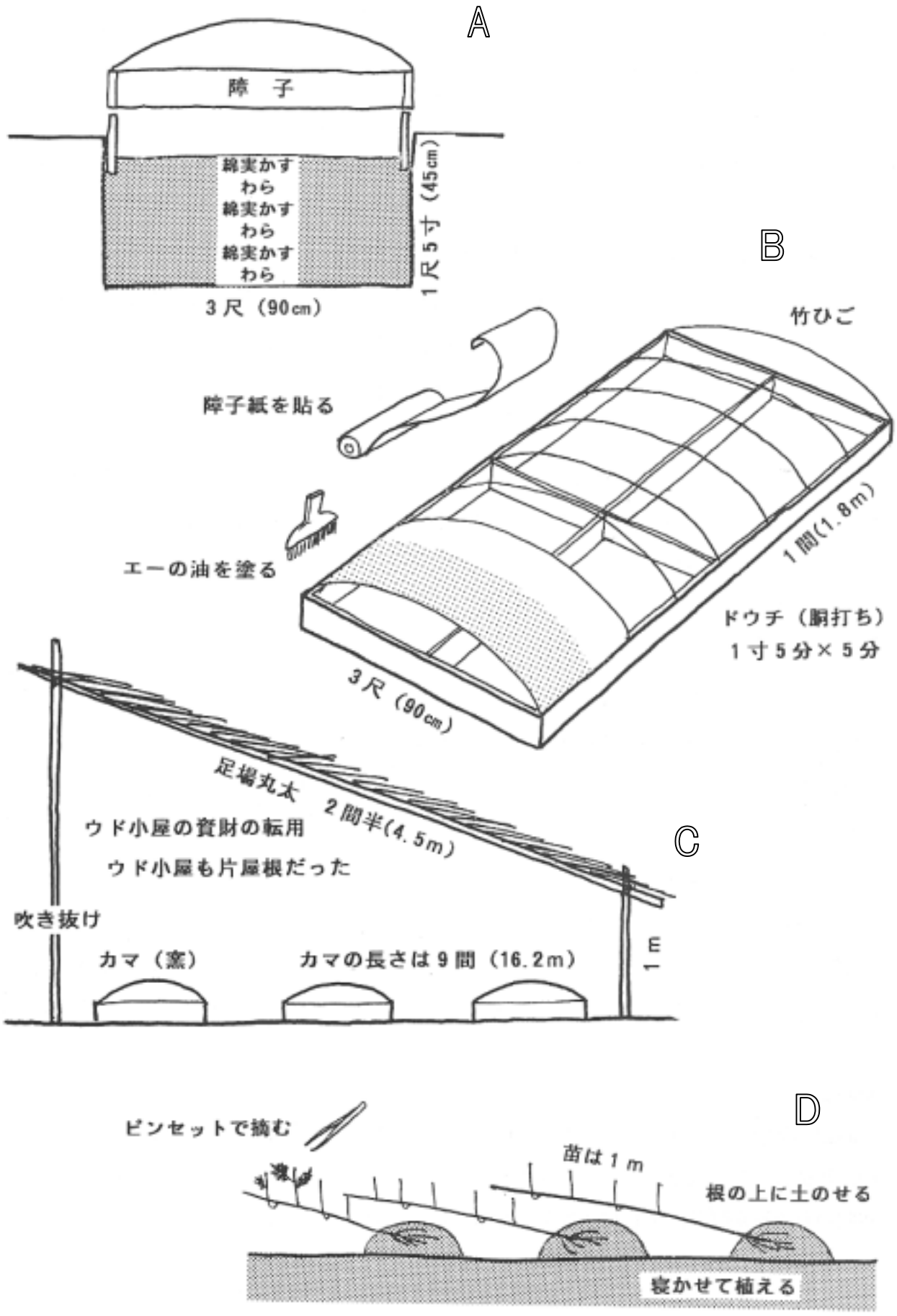
◆ピンセットで収穫

苗は地元でも作れたが短くて連作障害も大きいので、愛知県の一宮から仕入れた。

〈D〉のように 1m 程の苗を横たえて根に土をかける。1 本の苗から 10 本程度の枝が出てきて、そこから出た芽をピンセットで摘み取っていく。正月明けから 4〜5 月が収穫期、ツミヤ（摘み屋）は近所の農家の主婦のパートで 5〜6 人来てもらった。ピンセットは吹田の片山辺りの鍛冶屋に打ってもらったが高いので、後には薬局で買った。

◆苗の高値や人手がなくて

苗は 7〜8 月に一宮まで行って畑で買いつける。そのあと台風が来ると根が傷んで 10 本出るべき芽が 2 本程しか出ないこともあった。人手もなくなってきたので昭和 40 年頃やめた。45 年頃までやっている人もあった。


A
障　子
綿実かす
わら
綿実かす
わら
綿実かす
わら
1尺5寸（45cm）
3尺（90cm）
B
竹ひご
障子紙を貼る
エーの油を塗る
1間（1.8m）
ドウチ（胴打ち）
1寸5分×5分
3尺（90cm）
足場丸太
2間半（4.5m）
ウド小屋の資財の転用
ウド小屋も片屋根だった
C
吹き抜け
カマ（窯）
カマの長さは9間（16.2m）
1E
D
ピンセットで摘む
苗は1m
根の上に土のせる
寝かせて植える